

# 圭陵会FAXニュース

発行所:岩手医科大学圭陵会  
 発行人:石川 育成  
 編集人:酒井 明夫  
 連絡先:TEL019-624-8386  
 :FAX019-624-8380  
 e-mail :info@keiryokai.gr.jp

## 第2号内容

- ・岩手医大医学部定員20人増
- ・病気の子の虫歯治療、支援
- ・矢巾移転用地 規制解除へ協議本格化
- ・心電装置で多くの情報
- ・肝臓切除手術 国内初の高度医療認定
- ・循環器医療センター 付属病院に統合へ
- ・リンパ浮腫手術に成果
- ・肝疾患の悩み電話で対応
- ・脳血管疾患 血液検査で早期発見

H20.11.5 岩手日報

# 医学部定員693人増

## 文科省09年度 73大学が地域貢献策

医師不足の深刻化に対応するため、文科省は四日、医学部がある七十九の国公私立大(防衛医大を除く)のうち、七十七の大学で二〇〇九年度の医学部定員を計六百九十

三人増やし、総定員数を八千四百八十六人とする計画を公表した。総定員は、一九八一年度の八千二百八十八人を上回り過去最多となる。増員は、政府が昨年決めた緊急医師確保対策分として百八十九人、重要政策を示す「骨太の方針二〇〇八」での特例措置分が五百四

六十二校が、卒業後の一定期間、地域医療に従事する学生への奨学金を設ける。入試で地元高校出身者を対象とするなどの「地域枠」を設けるのも四十七校に上った。

### 岩手医大は20人増

地域枠5人増

本県の岩手医大(小川彰学長)は二〇〇九年度から、医学部定員を二十人増やし、百十人とする。二十人のうち五人は県内高校卒業者を対象にした「地域枠」を採用する方針。

同医大は〇八年度から医学部定員を八十人から九十人に拡大。増員した十人は「地域枠」に充てており、来年度はさらなる増員で深刻な医師不足に対応する。

文科省によると、特例措置分が五百四十四人。文科省は「当面の緊急的な措置。一〇年以降は医療界の意見や厚生労働省による医師の需給状況を踏まえ検討する」としている。増員は年内に正式決定の見通し。

同医大は全診療科の医師絶対数が不足している北東北の医療崩壊

文科省によると、特例措置分が五百四十四人。文科省は「当面の緊急的な措置。一〇年以降は医療界の意見や厚生労働省による医師の需給状況を踏まえ検討する」としている。増員は年内に正式決定の見通し。

定数増の内訳は国立大が四十二校で三百六十三人、公立大八校で五十九人、私立大二十七校で二百七十一人。大学別では十人前後の増員が多く、岩手医大と順天堂大の二十人が最も多かった。昭和大学と近畿大は増員がなかった。

**圭陵会FAXニュース**

圭陵会広報局では会員の相互理解を深めるために、岩手医科大学内の情報を「圭陵会FAXニュース」として配信致しております。圭陵会支部長におかれましては、圭陵会会員への情報連絡をお願いします。

なお、圭陵会ホームページよりPDF形式でダウンロード頂けます。

圭陵会ホームページアドレス  
<http://www.keiryokai.gr.jp/>

岩手日報ホームページアドレス  
[http://www.iwate-np.co.jp/newspack/cgi-bin/newspack\\_s.cgi?s\\_national\\_I+CN2008110401000701\\_2](http://www.iwate-np.co.jp/newspack/cgi-bin/newspack_s.cgi?s_national_I+CN2008110401000701_2)

H20.9.10 読売新聞

# 病気の子の虫歯治療、支援

## 受け入れ医師の情報提供

病気治療を受けているた

めに、虫歯治療が受けられない子どもたちを支援しようと、県歯科医師会と県、岩手医科大歯学部が協力し、受け入れる医療機関などの情報を保護者に提供していくことになった。

岩手医大付属病院では、小児がんやぜんそくなどの「小児慢性特定疾患」の治療を受ける子どもが虫歯治療を受ける際、小児科と並行して歯科の治療を受けることができる。しかし、退院後は、どこの歯科医で治療を受ければいいのかわからないとの相談が県に寄せ

られていたという。

一方、小児白血病などの病気では、口内炎が起きやすくなるといった知識が、歯科医師側にも必要になることから、県歯科医師会と岩手医大、県が連携して対応することにした。県は病気を持つ子供の虫歯治療を受け入れる県内10地区の歯科医師を紹介するチラシを作成し、県内の保健所で配布を始めた。

県歯科医師会の佐藤保専務理事は「病気で悩んでいる家族を歯科治療の面から支えることができる。今後は虫歯予防の知識も広めて

いきたい」と話している。

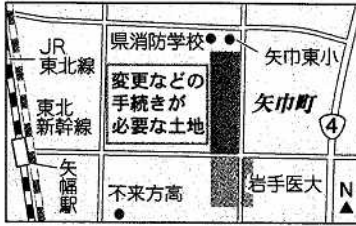
H20.9.19 岩手日報

# 大 医 手 岩 地 用 転 移 巾 矢

## 規制解除へ協議本格化

### 県、国と10年度にも事業 下旬から

岩手医大(大堀勉理事長)が矢巾町に同医大の施設を段階的に移す総合移転整備事業で、大きなハードルになっている土地の法規制変更協議が今月から本格化する。昨年四月に薬学部が開設されるなど計画は進んでいるが、病院機能などの移転構想を進めるには、土地利用の変更手続きが必要。県は今月下旬から国と協議に入り、都市計画の変更と農業振興地域解除を求める方針。数百億円とみられる移転事業費の確保など課題もあるが、協議が順調に進めば、早ければ二〇一〇年度から事業が動き出す。



今回、協議の対象となるのは、県消防学校などに隣接する土地で面積は約18畝。都市計画法による市街化調整区域(原則的に農林漁業用建物以外不可)、農業振興地域(農業投資優先地域)の農用地に指定されている。同

医大は矢巾町を通じて地権者と交渉している。開発を進めるには原則として、市街化調整区域を市街化区域(市街化促進エリア)に変更すること、農業振興地域の農用区域解除

今月下旬からスタートする県と国との協議では、農業の安定を図るために設けられている規制に対し、岩手医大の施設移転の重要性を示せるかがポイントになる。

県は▽本県唯一の医師養成機関▽地域医療の拠点として大きな役割を果たしているなどの点を強調、協議開始から一年以内の決着を目指す方針だ。

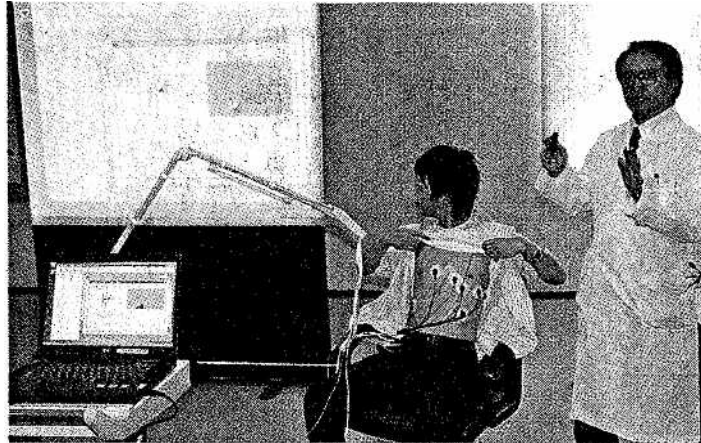
岩手医大の移転構想は、現在の病院や駐車場が狭いこと、建物が老朽化していることなどから、二十年ほど前に持ち上がった。大堀理事長は「現在の病院の周囲は交通渋滞もひどい。患者さんのためにも、一日も早く移転し建て替えをしたい。一日千秋の思い

だ」と協議の順調な進展を望む。

岩手医大総合移転整備事業 盛岡市丸丸などから矢巾町西徳田、東徳田、藤沢の約36畝の敷地に、施設の総合的な移転を段階的に行う。第1次事業は07年3月までに終了。事業費は約160億円。薬学部と医・歯・薬学部共通の教養部などが建設された。第2、3次事業では、医・歯学部校舎や付属病院など病院機能の一部を移転する計画。県高度救命救急センターの移転も検討されている。一方、既に移転した盛岡市本町通の旧教養部、移転後の内丸地区の活用が課題になっている。

H20.9.25 岩手日報

# 心電装置で多くの情報



高分解能心電解析装置を前に、機能を説明する岩手医大の中居賢司教授(右)

## 岩手医大と2社 産学共同で開発

岩手医大(小川彰学  
長)とアイシーエス(盛  
岡市、郵野善義社長)、  
フクダ電子(東京、福

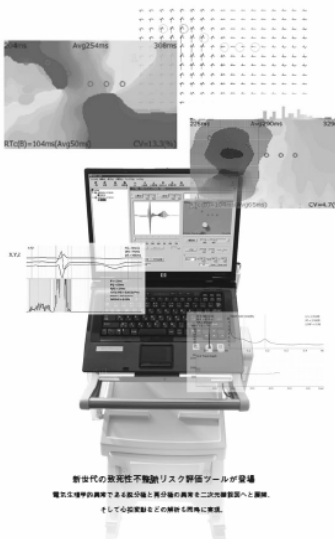
田孝太郎社長)は二十四日、産学共同で開発した「高分解能心電解析装置DREAM-EGG」の成果を発表した。これまで同様に心電図をとる方法で、致命的不整脈など、より多くの情報を得ることができるとしている。

同装置は、十個の電極を体に付けて十分程度待ち、独自の開発ソフトで解析すると、致命的不整脈や心筋梗塞かどうかなど、さまざまな情報が分かる。心臓を二次元のカラー図で示しており、色の違いにより、心臓のどの辺りに異常が発生して

いるかも見ることができるとしている。これまでの心電図のほかに別の検査が必要だった。県の「夢具士いわて戦略的研究推進事業」の補助約二千五百万円を受け、二〇〇五―〇七年度に開発した。岩手医大が臨床でのニーズ把握などの研究、アイシーエスがソフト開発、フクダ電子がハード開発を担当。三月に薬事認証された。

フクダ電子は、十一月から同装置を全国で販売する。機能によって変わるが、値段は五

百万一六百万円程度を予定している。岩手医大は既に装置を使った検査を始めている。盛岡市の岩手医大で記者会見した同大歯科内科学科の中居賢司教授は「患者さんの体に負担をかけず、一つの検査で多くの情報を得られる」と利点を語った。



新時代の致死性不整脈リスク評価ツールが登場  
東北大学理学部附属心臓血管センターと岩手大学二次代謝病センター  
と共同で心電装置などの開発も情報に実証。

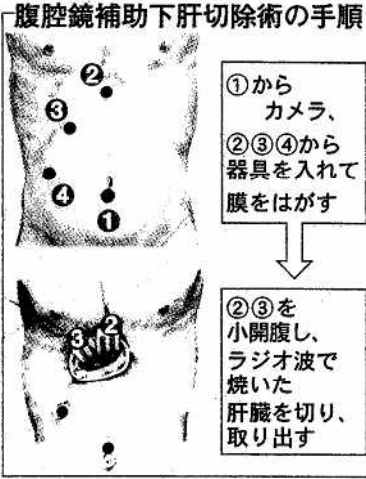
フクダ電子  
DREAM-EGG

# 岩手医大の肝臓切除手術

# 国内初の高度医療認定

# 入院費など保険適用

岩手医大は二十五日、盛岡市の同医大で記者会見し、外科学講座(若林剛教授)の「腹腔鏡補助下肝切除術」が、国内初の高度医療に認定されたと発表した。高度医療は、国が本年度創設した制度で、入院費用などに保険が適用される。同切除術は肝がんなどが



対象。通常の開腹手術に比べて、傷が小さく、入院期間も短縮される。全国から患者を受け入れる拠点病院としての機能が高まりそうだ。

同切除術は、肝がんや肝良性疾患の患者が対象。①腹の四力所を切開(約1センチ)し二酸化炭素で膨らます②一番下の切開した部分にカメラ、そのほかには器具を挿入、肝臓の周りの膜をはがす③肋骨のすぐ下を小開腹(8-10センチ)し、肝臓を切り取り出す。

若林教授らのグループは肝臓を切除する際、肝臓からの出血を減らすため、ラジオ波で焼く方法を採用。肝臓を切る前に熱を加えて血液を凝固させる。ラジオ波は通常、肝細胞がんの治療に使われるが、医療機器の薬事法上適用外となるため、これまで保険医療は併用できなかった。

高度医療評価制度(薬事法の承認が得られていない医薬品、医療機器を使う先進的な医療技術で、一定の要件で行われるもの)について安全性や有効性が認められれば、保険診療との併用が認められる制度。2008年4月に始まった。

同切除術は、傷が通常の開腹手術に比べて四分の一から六分の一程度。回復が早く、開

腹手術だと二―三週間だった入院期間が一週間程度にまで短縮される。肝臓の70%弱まで切除が可能。

一週間の入院で手術費(四十四万九千円)と入院費用を合わせて約百二十万円だったが、高度医療の適用で、手術以外の入院費用などに保険が適用となるため、約七十万円となる。

同医大は十例の症例を積み、今年五月に高度医療を申請。七月の高度医療評価会議で国内第一号として選定され、今月、岩手社会保険事務局から承認受理通知を受けた。

県の地域がん登録によると、人口十万人当たりの本県の肝がんでの年齢調整死亡率(二〇〇五年)は十・三人(全国十五・〇人)。がんによる部位別死亡

で見ると、六番目。二十五日の記者会見には、若林教授と新田浩幸講師が出席。若林教授は「一体に優しい方法で肝がんと手術ができることは、患者さんにとっても朗報。今後、全国的に普及していくと思う」としている。

H20.10.23 岩手日報

器循環大医手岩  
医療センター

# 付属病院に統合へ

## 組織集約し運営効率化

岩手医大(大堀勉理事長)は来年四月から、盛岡市中央通一丁目の岩手医大付属循環器医療センター(岡林均センター長)を、同市内丸の同医大付属病院(小林誠一郎院長)に統合する。組織を集約することで、運営の効率化を図る。診療面で大きな変更はないが、患者の医療費支払いなどが付属病院に一元化され、利便性が高まる。

統合は厚生労働省の「設に循環器内科がある」している部分があると定期的な検査で、両施など、病院機能が重複」の指摘を受けて判断し

た。岩手医大は同様の理由で、二〇〇五年四月に付属病院と歯学部付属病院を統合している。患者は両施設で診療を受ける場合、ともに岩手医大の病院であっ

ても組織が違つたため、別の病院を受診する時と同様の手続きや医療費徴収が求められているが、統合後は、付属病院で医療費支払いが済む。

器医療センターは、同医大の創立六十周年記念事業として一九九七年に開院。病床数は百十五床で、診療科は五科。

院事務部長は「統合後も病院の運営はこれまで通りに行う。患者から見て分かりやすい診療体制になるだろう」と話している。

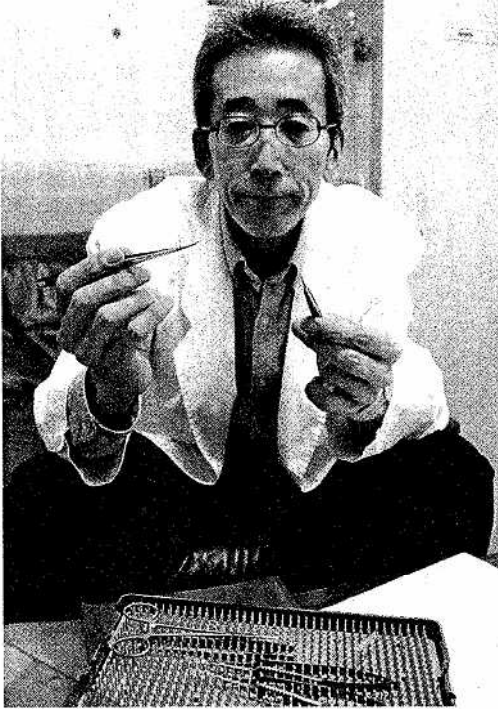
同医大は現在、統合に向けて、患者の情報整理などの準備を進めている。付属病院は一九二八(昭和三)年開設。病床数は千五十一床(精神病床七十八床を含む)で、診療科は三十九科。付属循環

同医大の柳沢茂人病

H20.10.25 岩手日報

# リンパ浮腫手術に成果

岩手医大形成外科学講座(小林誠一郎教授)のリンパ浮腫治療法「顕微鏡下リンパ管細静脈吻合」が、成果を上げている。全国的には一般的になりつつあるが、県内の病院で実施しているのは同医大だけ。リンパ浮腫は、医療従事者の間でも知識や治療法がまだ普及していないのが現状。子宮がんや乳がんの手術後に発症して苦しむ患者は少なくなく、治療の選択肢が広がりを待っている。



手術に使う髪の毛より細い糸を手で「治療法をより多くの人に知ってもらいたい」と語る柏克彦准教授

## 岩手医大 管と静脈を接合 治療方法広がる

手術は、皮膚を2、3センチ切開し、顕微鏡を使って直径0.5ミリ以下のリンパ管と静脈を髪の毛より細い糸で縫い合わせる。

本来、リンパ液はもっと太いレベルで静脈に入るが、細いレベル

リンパ浮腫 老廃物を回収するリンパ液の循環が停滞すると起き、手や脚がむくみ、だるさや疲れやすさなどを生じる。悪化すると歩行に障害が生じることもある。原因不明の「原発性リンパ浮腫」の人もいるが、多くの人は子宮がん、乳がんの手術などに伴い、脇の下、またの付け根のリンパ節を切除する「郭清(かくせい)」が発症の原因とされる。

で静脈につながる治療は「流れがせき止められた川(リンパ)に迂回路をつくり、海(静脈)に流すイメージ」(岩手医大形成外科学講座)だ。局所麻酔の場合、一回の手術で二カ所程度が目標。一泊程度入院で費用は一回四万二千円から八万円程度。全身麻酔か局所麻酔かは患者の希望で選ぶことができる。

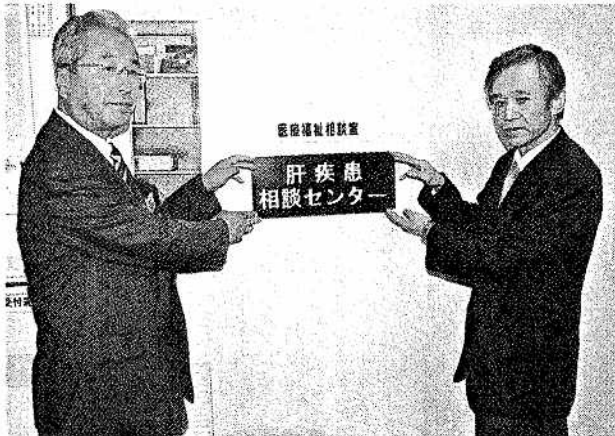
同医大は二〇〇〇年から〇七年までに腕、脚など七人を手術し、六人に効果が得られた。一般的には三分の二程度の患者に効果があるとされている。一度の手術で効果が出る人もいるが、リンパ管が見つからないか細すぎてつなげない▽つなげた静脈の圧力が強い▽か吻合部に血栓を生じ詰まってしまう▽などの理由で効果が得られにくい場合もある。こうした場合、数回の手術が想定される。

リンパ浮腫の保存療法は、皮膚をなでるようにしてリンパ液を流す「リンパドレナージ」や、弾性着衣を着用して症状をやわらげる方法が中心。リンパ浮腫は手術で命が助かった後の代償とも見られがちで、医療従事者にはあまり重要視されていない。同大形成外科学講座の柏克彦准教授は「手術は、皮膚の浅い場所にあるリンパと静脈をつなぐので、体への負担が少ない。このような治療法があることを知ってもらいたい」と話す。

岩手日報ホームページアドレス  
[http://www.iwate-np.co.jp/cgi-bin/topnews.cgi?20081025\\_16](http://www.iwate-np.co.jp/cgi-bin/topnews.cgi?20081025_16)

H20.10.25 岩手日報

# 肝疾患の悩み電話で対応



開設式で肝疾患相談センターのプレートを掲げる岩渕良昭部長(左)と鈴木一幸診療部長

県は二十四日、盛岡などの悩みを電話で受  
市内丸の岩手医大付属 け付ける。多くの患者  
病院(肝疾患診療連携 からセンター設置を望  
拠点病院)内に県肝疾 む声が相次いでいた  
患相談センターを開設 けに、期待が大きい。  
した。同病院の相談員 開設式で県保健福祉  
がウイルス検査や治療 部の岩渕良昭部長は

## 岩手医大に相談センター 県が開設

「多くの方の相談に答 治療法」など。  
えて安心感を持っても 受付時間は月曜日か  
らうようにしたい」と、 ら金曜日の午前九時  
岩手医大付属病院の鈴 午後四時半、第一、第四  
木一幸消化器・肝臓内 土曜日の午前九時正  
科診療部長は「各医療 午。祝日や十二月三十  
機関と連携し、一人で 日ー一月三日は休み。  
も多くサポートするよ 県は、岩手医大付属  
う体制を整えたい」と 病院を「肝疾患診療連  
あいさつした。 携拠点病院」に、盛岡

### 指定医療機関との連携期待

肝疾患相談センター 市の県立中央病院など  
は、県が同病院に委託 十五病院を「肝疾患診  
して開設。同病院の相 療専門医療機関」に、  
談員が電話で対応し、 医院など四十二医療機  
専門医や看護師の指導 関を「肝炎かかりつけ  
を受ける。 医」に指定しており、  
相談内容は▽ウイルス 相談センターとの連携  
ス検査▽過去に出生、 が期待される。  
手術、輸血をした経験 県肝疾患相談センタ  
がある▽母子感染▽B ーの電話番号は019  
型、C型肝炎の症状や ・908・2007。

岩手日報ホームページアドレス

[http://www.iwate-np.co.jp/cgi-bin/topnews.cgi?20081025\\_12](http://www.iwate-np.co.jp/cgi-bin/topnews.cgi?20081025_12)



H20.10.29 岩手日報

# 脳血管疾患

# 血液検査で早期発見

## 岩手医大・人見教授が新技術

# 11年の実用化目指す

岩手医大解剖学講座の人見次郎教授(50)は、血液検査で脳卒中や脳梗塞などの脳血管疾患の危険性を発見する技術を確立した。血管が詰まる血栓になる前の段階でリスクを突き止めることで、予防につながることも、合併症などの早期対処も可能となる。人見教授は医薬品開発メーカーなどと共同研究を進めており、三年後の二〇一一年の実用化を目指す。実用化されれば、日本人に多い脳血管疾患を予防する国内初の技術として注目を集めそうだ。



人見次郎教授

人見教授は二十八日、盛岡市内で開かれた独立行政法人科学技術振興機構(JST)のイノベーションサテライト岩手(盛岡市)

● 本県の脳血管疾患(2005年)06、07年とも2位と高い。脳梗塞で亡くなった人数は、近年は05年の1404人をピークに1300人台で推移している。

の育成研究報告会で、この技術を発表した。人見教授は、JSTの助成を受け二〇〇六年から研究をスタート。脳梗塞の主因の一つで、内頸動脈硬化症の患者を対象に、血液中のタンパク質と血液細胞の遺伝子を解析した。

病理標本を作製、臨床情報を加えデータベースを構築した。内頸動脈硬化症患者と、健康者を区別する血清中の分子(診断マーカー分子)を発見し、今年九月に特許を出願した。さらに、血液細胞中から、内頸動脈硬化症患者と健康者を区別する七十二の遺伝子も見つけ、現在、特許取得

の準備を進めている。人見教授は「脳卒中など脳血管異常はこれまで、磁気共鳴画像装置(MRI)などで血栓を発見してきたが、今回の研究はMRIなどに比べて医療費が安い検診により、血管異常のリスクを把握できる」と強調、「今後は大手診断薬企業に入ってもらい、診断薬試作、臨床試験、製造販売を目指す」としている。

研究は、岩手医大、医薬品研究開発のバイオス医科学研究所(神奈川県)、東北化学薬品の生命システム情報研究所(盛岡市)、試験薬・分析機器メーカーのバイオ・ラッド、ラボトリーズ(東京都)の四者で進めてきた。

バイオス医科学研究所の浦上研一社長は「(この技術・特許は)国内での競合は存在しない。現在、脳血管にかかわる診断薬は少なく、百億円市場と予測される。診断薬を来年

にかけ試作し、岩手医大で臨床試験を行い、三年かけ事業化した」と話す。早期判別が画期的小笠原邦昭・岩手医大脳神経外科学講座教授の話、血栓が飛ぶかどうかの可能性を早期に判別できることが画期的だ。手術前に脳血管の異常が分かれば、現場としては合併症を防ぐための対処ができる。